



わたしの聖戦

女性が働くことについて

108

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

便利さへの戸惑い

私は昭和33年生まれ、俗にいう「高度経済成長時代」を体感した世代に相当する。

東京オリンピックや東京タワー完成、皇太子ご成婚、大阪の万博など、当時の出来事はいずれも歴史に残る、日本の財産のようなもので占められている。

実生活では、少しずつ周りに新しいものが増えていったことを記憶している。母親が盥(たらい)を使っていた姿をおぼろげながら覚えているが、いつの間にかそれが洗濯機に変わった。テレビが白黒からカラーになったときは、近所の人たちが

な時代に生まれたということになる。

当時のことが走馬灯のように頭を駆け巡ったのは、コンビニに並ぶ飲料水の前に立ったときだった。次から次へと発売される色鮮やかな飲料水をしみじみと見つめながら、これらは富の象徴なのか、

トボトルで売られるようになったとき、正直ころどこかで警鐘が鳴った。水は水道、茶は茶の葉っぱから当然だったのに、そういったものを他人の手にすべて預けて、石油で作られたペットボトルに入れて飲むということが、贅沢を超えた「いけない」行為

するものかもしれない。正直、とてもついていけない。おかしなこだわりが、人間として間違った方向に進んでいるのではないかという思いが拭いきれない。昭和も過去の時代となったからには、そんな考えこそが古いといわれることは承知なのだ。が、どうも居心地が悪いのだ。

洗濯機は変わった。
テレビが白黒から
カラーになった時は...



「いけない」行為のように思えたのだ。しかし、そんな危惧もいつの間にか便利という名の現実にあっさり押しやられ、水やお茶を買って飲むことが少しずつ増えていった。

変化を好まず、保守的になるのは老化の証拠である。私も単に年を取っただということなのだろう。でも忘れてはならない。生物の進化の終着点は「ヒト」ではなく、さらに知能の高い生物が突然変異で登場する可能性があるということ。

前触れもなく突然オルガンが家に運ばれてきたこともあったし、ご飯は電気釜で炊くのが当然になったのもこの頃だ。はつきりとした記憶はないが、恐らく車も割と早くからあったように思う。

私の家は、金持ちでも何でもなく、ごくごく普通のサラリーマンであったが、それでも目まぐるしく発展する日本の経済と生活の変化に何とか適応するだけの力と夢を持っていった。いわゆる一億総中流といわれる時代のまっただ中に突入していくのを日々実感できたわけで、今思うと実に幸せ

はたまた無駄の証明なのか、などと哲学者のようには考え込んでしまった。かつて、飲み物といえば水とお茶、牛乳くらいで、時々口にする甘い粉末のジュースやラムネはちよつとだけ特別なものだった。水やお茶がペッ

ただし、いつも「これでいいのか」という思いは僅かに残ってはいるのだが。イギリスに端を発した産業革命による世界の変貌は歴史に埋もれているが、近年のITの発展はもしかしたらそれを凌駕

イラスト・三浦義雄